

主の2015年3月27日
第91号 イースター号

日本キリスト教団
泉ヶ丘教会
 牧師 松永政和
 ☎590-0114
 堺市南区槇塚台1-1-5
 TEL/FAX 072-291-9532
 メール izumigaoka9532church@yahoo.co.jp

■ 礼拝・集会 ■

- ・ 主日礼拝(日)午前10時30分
- ・ 教会学校(日)午前9時
- ・ 聖書を学び祈る会(木)午前10時30分
- ・ キリスト教入門講座・家庭集会
- ・ マリア会・テモテ会、他

■ 教会標語 ■

『キリストを証する教会』
一手を携えて歩むー

復活のイエスに出会う

牧師 松永 政和

「復活」、「生命の甦り」。それなりに科学が発達し、人は多くのものを得、多くのことをするようになりました。しかしどれほどそうであろうと、人に成しえないこと。知恵があり、力があり、財産もあり、優れた友を持ち、愛する家族に囲まれていても、決して成すことのできないこと。それは自らの死からの復活、他者を甦らせることです。それが出来るのはただお一人。「復活」、それは紛うことなく唯一、神の業です。人は、そのことを信じるか信じないかです。ただ、信じようが信じまいが、イエスの復活は事実だということとはキリスト教会が持ちます共通の認識です。

復活の出来事を描く聖書を読んできて気付くのですが、この甦られたイエスに出会った人たち、誰も十字架に架かり死に、墓に葬られたイエスが、復活するということを信じていなかったということ。そうですから、前もってイエスが言われていた復活のイエスを捜しに行こうなどと考えもしません。ただ、自分たちに災いが及ばないようにひたすら身を隠していたのです。そのような不信の者たちの中に甦られたイエスが近づいてこられます。復活のイエスに出会えるのは、私たちの方からではなく、イエスの方から近づいて来てくださるからです。

そのような甦りのイエスとの出会いを三人の人の物語から見えてまいり

ます。まず、一番の弟子と言われま
すペトロ。イエスの十字架の前に、
「たとえ一緒に死なねばならなく
なっても、あなたを知らないなど
は決して申しません」と告白しな
がら、三度も「イエスのことは知ら
ない」と言ったペトロ。十字架刑が
行われたエルサレムから逃げるよう
に故郷ガリラヤに帰り漁師の仕事に
戻ります。そのように離反したペト
ロに復活されたイエスが近寄ってこ
られ、「ペトロ、わたしを愛するか」と
三度たずねられ、三度「イエスを
知らない」と言ったペトロを赦され
ます。そして改めて弟子の務めを託
されます。

このペトロと共にイエスの十二
人の弟子であったトマスという人物。
彼は熱血漢だったのでしようか、そ
れとも臆病だったのか。イエスを捕
らえようと待ち構えている者たち
の所に向かわれるイエスを見て、「わ
たしたちも行って、一緒に死のう
ではないか」と心を奮い立たせま
す。しかし実際に十字架の前に捕ら
えられたイエスを見て、他の弟子
たちと一目散に逃げだしていきます。
彼は、そのことをどれほど悔やんだ

ことでしょうか。しばらくは仲間
たちの所にも戻れませんでした。ま
して復活のイエスに会おうなどは、
そんな彼ですが、辛抱たまらず仲
間の所に戻っていきます。

そこで知らされたのが、仲間
たちが甦られたイエスに出会った
こと。トマスはそのようなこと
信じられませんか。有り得ない
と思っただけです。捕らえにきた
敵の前に、何ら抵抗もせず、易
々と捕らえられ、引いて行かれ
たイエスが、どうしてそ



のような奇跡以上の奇跡を
することができるのか。トマスは、
「あの手に釘の跡を見、この指を
釘跡に入れてみなければ、また、
この手をそのわき腹に入れてみ
なければ、わたしは決して信じ
ない」と言っています。強く
イエスの復活を否定します。そ
れはまるで私たちのようです。

次の週の始めの日。そのト
マスの前に甦りのイエスが近寄
って来られます。そして、「わた
しを見たから信じたのか。見
ないのに信じる人は、幸い
である」と言われ、かたくな
なトマスの心を解かれます。こ
のイエスの言葉を聞いてトマス
は何と言ったか。「わたしの主、
わたしの神よ」。これは最も短
く、最も的確に言い表された信
仰告白です。

さて復活されたイエスに出
会った物語の三つ目は、クレオ
パともう一人の仲間のこと。二
人はイエスの弟子です。しかし
彼らはイエスが復活されたとい
う女弟子たちの言葉を聞きな
がら、十字架に架かって死んだ
イエスに失望し、望が断たれた
と、彼らの故郷エマオを指して
エルサレムから離れていきます。
道々、彼らの口を突いて出てく
る言葉は、あれ



ほど期待していたイエス、その望みの途中で十字架に架けられて死んだイエスのことです。力なく歩を進める彼らの心には三日目に復活すると言われていたイエスの言葉が入る余地はありません。

そのような失意の中に在る者たちに旅人姿の復活されたイエスが近づいてこられ、一緒に歩まれます。二人は、その旅人が誰であるか分りま

せん。何事も、思いが自分の内へのみ向いている時には外のことは分らないものです。甦りの主、救いを与えてくださるイエス、命の源である御子イエスと気付くのは、語られるイエスの言葉によってです。私たちの思い、疑念をすべて超えて、御言葉は復活のイエスへと導いてくれます。エマオに帰ろうとする二人の弟子は、その時はまだイエスとは気づかず、旅人から道すがら聖書の解き明かしを受け、無理にと誘った食事の席で、賛美の祈りを唱え、パンを裂かれた旅人の姿を見て、それが復活のイエスと気付きます。それは離れようとする信仰を再びとり戻させる甦りのイエスの言葉です。

さらに、ここに登場した三組の人たちだけでなく、聖書は復活のイエスに出会った人たちが大勢いたことを告げています。それは過去の人たちばかりではありません。真に神が真に人となられた降誕のイエス。弱さを抱える人々と共に歩まれるイエス。十字架のイエス、そして復活のイエスに出会えるのは、彼らだけではありません。私たちもです。私たちも身近にあり手にすることのでき

る聖書を通して甦りのイエスに出会うことができず。それも私たちが求める前に、イエスのほうから近寄りて来てくださいます。

Ω

イースター



村田 幸子

私は写真撮影が大好きで、出かける時はいつもカメラを持って出かける。主に花の写真撮るのが得意分野となっている。今年も春がやってきた。春は、花が一斉に開く。目の前が明るくなるのもこの時季なのです。

そして、神様は私たちに素晴らしきプレゼントを下さったのも、この時季。暗い冬から明るい春へ、神様

は変えてくださいました。冬眠していた動物たちも目を覚まします。神様が呼び起こして下さったのでしよう。啓蟄、地下で眠っていた虫たちも目を覚まして、地上に出てきます。神様が私たちに下さった愛は、いつも変わらない大きな愛です。

自然界は神様の愛がいっぱい見えます。自然界には復活の業が満ち溢れています。なんて素晴らしいんでしょう。どんなに小さな花たちにも、どんなに大きな花たちにも必ず季節が来ると、命を与えられるのです。草花だって、とっても美しい花が咲きます。

Happy Easter !
素敵なこの季節にイースターをお祝いできることが出来ることに深く感謝したいですね。 Ω



マザーテレサの故郷 マケドニア・アルバニアを 訪ねて

中山 アイ子

「神はその独り子を賜ったほどにこの世を愛された。それは御子を信じるものが一人も滅びないで永遠の命を得るためである。」(ヨハネ3・16)

2015年9月のはじめ沈没事故で亡くなり、海岸に打ち上げられたシリア難民の3歳の男の子の写真は衝撃を受けました。多数の難民がバルカン諸国を通過して、西欧を目指しますが、難民問題への対処が遅く、各国の難民の押し付け合いの報道には胸が痛みます。

かつて、バルカン半島は、文明の十字路と呼ばれ、様々な民族が出たり入ったりしてモザイクのような民族分布を残して行きました。

この度、初めて、バルカンの国、マケドニア・アルバニアを訪ねました。

マザーテレサの信仰や行動が、どのような社会的、歴史的な背景の中から生まれたのかを知りたいと思いました。

修道女シスター・アグネス(マザーテレサの本名)はマケドニア生まれのアルバニア人です。

古代マケドニアは、アレクサンドロス大王が東方への夢を培った地でもあり、東方遠征後に広大なヘレニズム世界が展開され、共通語としてギリシャ語が使われ、新約聖書はヘブライ語やアラム語でなくギリシャ語で書かれました。パウロも流暢なギリシャ語を書いたり話したりして、ヘレニズム諸国とエルサレムの間をテント商人として活動しています。アグネスの生まれ故郷・スコピエは、マケドニア共和国の首都になる前から、ヴァルダル川沿いの交通の要衝



でしたので、アグネスの両親もこのような物資流通が盛んなスコピエで、裕福な商人として生計を立てていました。

マケドニアのアルバニア人の多くはムスリムで、少数のキリスト教徒もギリシャ正教会に属しています。一家は、故郷に安住できないアルバ

ニア人少数派カトリック教徒でした。アグネスは、幼い時から、バルカン戦争や、二度の世界大戦、差別や民族紛争、国家の政治的思想で、市民生活の破壊や飢餓、貧困者の生活難と悲惨な状況を見てきています。民族間の争いが悲劇を生むという現実のなかで、目の前の一人の貧困者を救うことが、神さまから授かった命の大切さを知ることであり、神さまから授かった地球より重い命を生かすことに生涯を捧げました。

命が無為に失われていくのを見て、ヒンズー教徒の多いインドを活動の場と出来たのも、幼い時から異なる宗教や民族の中に混じって生活する環境が、彼女の力となったと思います。

アグネスが8歳の時にお父さんが亡くなりました。お母さんは働きながら、子供たちに、神さまを愛し、隣人を愛するように教えました。アグネスは幼い時から、教会活動に積極的で、家にいるよりも教会にいたことが多く子供だったようです。

マケドニア・アルバニアの山々の紅葉は素晴らしく、特に紅色より黄色に変わる樹々が目立ちました。山

国である日本とよく似た自然環境に親しみを感じました。

地震が多いのも似ています。スコピエで1963年7月26日に震度6.1の大地震があり、その瞬間を忘れないという記念のモニュメントには、地震発生の5時17分が刻まれていました。

彼女の故郷スコピエの新市街の石畳の道を歩いていくと、マザーテレサ記念館の前で等身大のマザーテレサの立像が、優しく迎えてくれました。

記念館の3階には硝子張りの明るく美しい礼拝堂があり、ステンドグラスに現代的にデザインされたマザーテレサが嵌め込まれています。

この記念館には、1979年にノーベル平和賞を受賞した時の写真などが展示されていました。

若くしてカトリック系の修道院に入り、アイルランドで神の召命を受け、インドに派遣され、「神の愛の宣教者会」を作り、貧者に愛の奉仕を捧げる活動を続けました。マザーテレサは真の宗教活動とは何かを世界に示した人物であったことなどが紹介されています。



インドの首都デリーとカルカッタのほぼ中間点にあるベナレスを十数年前に訪ねたことがあります。インドの母なる大河・ガンガー(ガンジス河)を指して長い旅を続けてきた巡礼者たちが、ガンガーに入り祈っている姿を見ました。ガンジス河岸のマニカル・ガートという火葬場のす

ぐ後ろの袋小路は、迷宮のようになっていて、でこぼこした小路は狭く密集し、日の光もあまり射し込まない所に、姥捨てされ住む家のない貧しい老人たちが、喜捨を求めて横たわっていました。インド社会は、カースト制度のために差別に苦しむ人々は救いがないように思えました。

マザーテレサは、孤児や障害者にも胸を痛め、インド政府から、ヒンズー教の廃寺院を譲りうけ「死を待つ人たちの家」というホスピスと「孤児院」を開設し、愛の奉仕を亡くなるまで続け、苦しむ人たちに愛と平和を祈った偉大な人でした。

「沈黙の果実は祈り、祈りの果実は信仰、信仰の果実は愛、愛の果実は奉仕、奉仕の果実は平和である」(マザーテレサ)

彼女の信念を、改めて真摯に受け継ぐことの必要を感じました。

マケドニア側の検問所でパスポート・チェックを受け出国し、再度アルバニアの検問所でパスポート・チェックを受け入国して、無事国境をバスで越えました。アルバニアは、ヨーロッパの中では唯一大学のない

国でしたが、度重なる戦禍から立ち上がり1957年に初のチラナ大学が設立されています。チラナ大学生は将来の希望の星です。大学の前のパルチザン通りの南端にある広場は「マザーテレサ」の名前が付けられています。アルバニアの「マザーテレサ国際空港」から出国し帰路につきました。

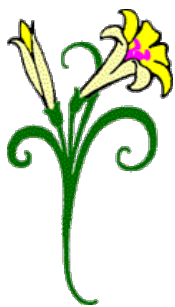
主なる神さま

あなたが裏切られ、鞭うたれ、公然と卑しめられた十字架の暗闇が、どれほど深いものであったかを心に刻み、信仰と愛のうちにもあなたを見つめつづける者としてください。

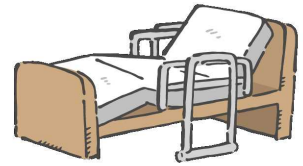
旅の初めから終わりまで守り導いて下さった復活の主の恵みを心から感謝いたします。

主に在りて

Ω



私と療養



村田 幸治

昨年四月、イースターを迎えて感謝しておりましたが、その後突然身体に異変が起き、左半身麻痺になり一瞬だめだと思いました。しかし神様は、決して私を見捨てられませんでした。まだまだ信仰薄い人間ですが、神を信じてこの病氣と闘うのだと心に誓い、意識はしっかりありました。妻に救急車を呼んでもらい、病院に運ばれたときも救急隊と容態を会話しながら集中治療室に入りました。治療の準備中にも医師から色々と質問を受けましたがはつきりと応答しました。

原因は、脳梗塞でした。体にいろいろな器具を取り付けて治療が始まりました。三日目からリハビリが二〇分ほど始まりました。最初は上半身の起き上がりから始まりました。起きては倒れの連続で安定性がないので頭はふらふらで器具を装着したままで大変疲れ挫折しそうになりましたが、やめてはいけないと歯を食いしばって頑張りました。指導員の方がリハビリは早いほど治りがいいと言って下さいました。

十四、五日間で集中治療室から一般病棟へ移動しました。一安心しました。後はリハビリの治療となり、しかしまだ器具が二、三本取り付けられていました。がちょっと楽になりました。交互に手足から運動を始めました。歩行器で歩けるようになりました。一ヶ月ほどで今度はリハビリ専門病院に転院し、本格的にリハビリの治療に入りました。いろいろな道具を使つての訓練で苦痛が先に走つてなかなかうまくいかず失敗ばかりでしたが、ひとつひとつクリアしていききました。退院まで一生懸命に努力して頑張りましたので、早く退院できました。



さて帰宅してからが大変でした。今度は自分との戦いでした。まずは毎朝毎夕ベッド上で手足を動かして体をほぐし、歩行の練習を少しずつですが続けて日常生活に戻れるようになりました。寒い冬をなんとか乗り切りました。まだ完全に回復していませんが、時間をかけてリハビリを続けていきます。

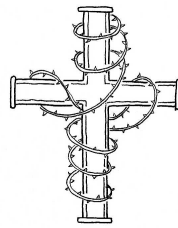
今年もイースターが近づいてきました。あれから早一年が経とうとしています。身体も八分目くらい回復しております。神様がいつもそばにいて下さつて感謝しております。神様を信じて一歩一歩と信仰の道を歩きます。

私の好きな聖句です。

「わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。」

(ローマ書14・8)

Ω



主は引き渡された

岸本 眞

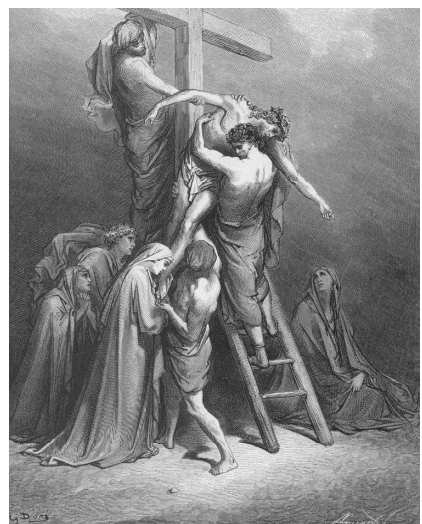
主イエス様は、ゲッセマネの園でユダの「裏切り」によって捕らえられ、ピラトの手に「引き渡され」、そして十字架の道へと歩まれました。ユダの「裏切り」という否定的な意味で使われるこの言葉は、原典の聖書では、ギリシア語で「パラディドミー」という言葉で表され、その

「裏切る」という言葉は「引き渡す」と同じ意味で使われる言葉だそうです。

しかしこのキリストの受難物語の中では否定的に使われる「引き渡し」という言葉は、「驚くべきことに新約聖書では同じ言葉を、それに引き続く使徒的な奉仕の特徴を『伝達する』という仕方で言い表す際に、今度は一転して、きわめて肯定的な意味で用いている」(*)と知らされて驚きました。

イエス様は「十字架の死に引き渡され、神から見捨てられる」究極の絶望の中から、この引き渡しを通して、栄光の復活という勝利を収められました。主は、ユダによって「引き渡される夜」(一コリント1・24)から始まる受難の道を、どうしても経なければならなかった救済の業として選び取られました。だから主の復活の栄光が明らかになるためには、裏切りという引き渡しが必要だったのだと思います。

「ユダがイエスを引き渡す以前に、神自身がイエスを引き渡されることを決意し、御子イエスが自分



身を引き渡すことを決意された。それは、アブラハムがイサクを惜しむことなく捧げたように、神は御子を惜しむことなく世へ引き渡された」(*)という神様の深い愛のご計画に基づいた引き渡しでした。

「引き渡し」という言葉は「伝承」とも訳すことができるそうです。

「引き渡される」とは、「神様ご自身が」罪深い人間の手によって主を十字架の死に「渡す」ことを選ばれたということでありながら、神様はそれを逆転して、救いの歴史に仕える使徒たちの「救いの伝承」の業としても用いられ、歴史の中で働かされる聖霊なる神様の導き(啓示)を通じて、今日の私たちの教会の礼拝

で告白する信仰告白として「継承」(伝承)されるようになりました。

死を前にして、主イエスは十字架の上で血を流されながら、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになつたのですか」(マタイ福音書27・46)と嗚咽されました。その言葉は、子なる神様が、父なる神様から見放されるという究極の御苦しみと孤独を通じてでしか私たちの罪を救うことができなかったことを、復活の主を目の当たりにした弟子たちはその後知らずされます。

主は引き渡され、人の手にかかれて、神様の支配から閉ざされた死の世界にまで下られました。しかし主は、死に打ち勝つ栄光の力をもつて復活されました。

主イエスは、神様の救いの御ことを一方的に私たちに伝えるためだけにこの世にいられたのではなく、ご自身を人間に引き渡すためにこの地上にいられました。教会は、このことを聖霊の導きを通じた信仰によって証し(継承し)続けることを神様から求められています。

そして主イエス・キリストは、今

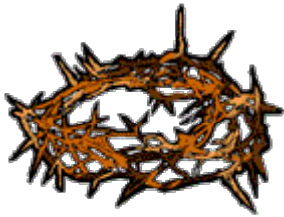
も尚、ご自身を私たち罪人の救いのために「引き渡され」続けられておられます。この深い愛と大きな赦しへの感謝は計り知れません。

主イエス様の復活の恵みであるイースターのこのときを、共に喜びつつ証し続ける教会の群れでありたいと祈ります。

「神は、その独り子をお与えになつたほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

(ヨハネ福音書3・16)

〔*芳賀力「神学の小径Ⅰ 啓示への問い」キリスト新聞社 〇



ドイツの クリスマスを堪能して

齊藤 一実



昨年末、夫とドイツ旅行に行ってきました。ドイツの冬は暗く寒いと聞いていたので、防寒は万全の備えで行きましたが、世界中温暖化現象なのでしょ、お天気も良く、少し歩くと汗ばむくらいの暖かさでした。

駅には大きなクリスマスツリーが飾られ、店や家の出窓も温かみのあるセンスの良いクリスマスの飾り付けで目を楽しませてくれます。それに町ごとにクリスマスマーケットが開かれています。子どもたちはものすごく早く回る観覧車やメリーゴーランドに乗って楽しそう。たくさんさんの屋台に木工芸のクリスマスの置き物やツリーの飾

り、アイシングされた色とりどりのクッキー、アドベントスター（泉ヶ丘教会礼拝堂にクリスマススの時期に吊られる大きな星もそうです）、クリストシュトレーン（イエス様のおくるみの形とされているケーキ）などが売られています。日本でいうとお祭りの夜店みたいなものでしょうか。私たちもドイツ人に混じって、からだを温めるグリューワインやホットビールにパン付ソーセージを食べながらマーケットを回りました。

観光メインの街はドレスデン。ザクセン王国の首都として栄え、宮殿や教会が立ち並んだ町でしたが、第2次世界大戦の空爆で一夜にして15万人が亡くなり、町の85%が破壊したそうです。町の中心にあるフラウエン教会も壊され、しぼらへ瓦礫の山のままだったようですが、東西統一後、再建工事が始まり、10年ほど前に完成したそうです。教会の塔の展望台からは町が一望できました。町の中心を流れるエルベ川、城や宮殿、赤茶で統一された屋根の建物、他の教会の高い塔が見え

ます。こんなに美しい町を壊すなんて、人間のすることは愚かです。

それからドイツの町のあちこちの石畳の道に見つけることができましたが、つまずきの石が教会の前にもはめ込まれていました。つまずきの石とはナチスドイツにより迫害殺害されたユダヤ人や反体制活動家たちを記憶の忘却から防ぐために、その人の名前、生まれた年、亡くなった年を刻んだ10センチ四方のプレートです。その人が牧師だったのか、ユダヤ人だったのか、どういった人だったのかわかりませんが、教会関係者の中にそういう人がいたという過去の歴史の事実を垣間見ることができました。

クリスマスには教会で礼拝やコンサートが行われています。教会にたどり着けば、前の掲示板を見て（ドイツ語なので何が行われるかはわかりませんでした）開始時間をチェックしておきました。

まず、12月24日午後2時から始まるフラウエン教会の礼拝にかぶりつくように参列しました。教会内部は明



るく、ドーム天井に白を基調に淡いピンクやブルーの絵が描かれています。正面の高い天井から響き渡るトランペットの音色から始まり、パイプオルガンの演奏、合唱団による合唱と続きます。教会専属の演奏家なので、どれもこの日のために練習してきたのでしょう、レベルの高い演奏でした。その後、カトリック旧宮廷教会へ教会のハシゴ。何が始まるのかわからなかったのですが、たまたま、お手洗いを求めて地下におりた時に、羊飼いの扮

する少年を見かけ「もしかしてオラトリオが始まるのかも」とテンション高まりました。予想どおり、教会の少年合唱団によるクリスマスオラトリオが始まりました。天井が高く、重厚で、ものすごく暗い礼拝堂に明るく可愛いボーイソプラノの歌声が響きます。何百人か入る礼拝堂は満席で、私たちは立ち見しました。我ら泉ヶ丘教会のクリスマスオラトリオも素敵なので、もっと広く開放し、多くの人来てもらえたらいいのじゃないかと思いました。

25日は朝早くにドイツ鉄道(DB)に乗り、ライプツィヒという町へ。目的はバッハが活躍したトーマス教会でのクリスマス礼拝です。バッハがこの教会で教会付属少年合唱団の作曲者、オルガン奏者&指揮者を勤め、「マタイ受難曲」もここで初演されたそうです。ちょっと違和感がありました。礼拝堂内にはバッハのお墓がありました。朝9時半開始ぎりぎりに到着すると、1500席ある席はいっぱいでした。始まったのは、バッハカンタータです。少年合唱団に、独唱、パイプオ

ルガン、管弦楽団の演奏から始まり、女性牧師の聖書朗読や説教、そして最後には賛美歌108番いざうたえや11番神の御子は今宵しもベツレヘムに生まれたもうを会衆と共に賛美しました。もちろんドイツ語なので私は文字を追うだけで精一杯でしたが。無料でこんなレベルの高い演奏が見聞きできるなんて、クリスマス時期ならではの醍醐味です。あまりに感動したので、夕拝にも参列させていただきました。

クリスマス、年末のドイツは、話には聞いて覚悟はしていましたが、博物館や飲食店などすべて閉まってしまいます。ちょうど閉店時間にお肉屋さんに行くと、サンドイッチが残っていたので、それちょうだいと言っても、完全無視して片付けるくらい、徹底したものでした。教会がなければ、何も観光するものが無いので、クリスマスチャンで良かったと思います。格別素敵なお祈りを堪能することができたのですから。

旅の後半は、フランスパリで留学中の娘あゆみと合流し、木組みの家がき

れいなウエッツラーという町や、夫と新婚旅行で訪れたハイデルベルクを旅して帰ってきました。みなさんのお祈りに支えられてあゆみは楽しい学びの時を過ごしております。 Ω



ケーキ作りの楽しいひととき

私たち泉ヶ丘教会では、クリスマス、イースターなど、教会行事が有る時にはパウロンドケーキを作り皆さんに振舞っています。

それはそれは美味しくて、期待して待たれていますし注文も多いです。今回もイースター記念祝会を前に、楽しく和気あいあいに、しかし味にはうるさく焼き上げました。フルーツケーキとレモンケーキ、四本を焼きました。

ご褒美に少しおやつにいただきましたが、いつものように美味しかったです。次はバザー献品、そしてクリスマス祝会の前に作ります。いちど参加されますとのお勧めします。楽しいですよ。



いくらクリスマスとイースターはつながってるって言ったってねえ...



<491回目の懺悔>

教会ひとコマ漫画